第２６号　　平成２０年１２月発行

みおしえ

法然上人立教開宗のお姿

平成２３年には法然上人の八百年御忌をお迎えします。

埼玉教区浄土宗青年会
http://www.saijousei.com

阿弥陀仏（あみだぶ）と
十声（とこえ）となえて　まどろまん
永（なが）き眠（ねむ）りに　なりもこそすれ

― 法然上人御作 ―

《意味》

南無阿弥陀仏とお念仏を十遍称えて、眠りにつきましょう。ともすると、今日の眠りが、永久の眠りになるかもしれないのですから。

以前、作家の秋元康氏がエッセイで次のような事を書かれていました。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

僕は最近、よく、「死」について考える。若い頃は、そんなことを考えたこともなかったし、明日という日は永遠に続くものだと思っていた。年齢的なものだろうか？ある人が、「人間40歳を過ぎたら、明日死ぬ確率は、みんな同じになる」と言っていた。つまり、10代の若者と70代の老人を比較した場合、寿命ということで考えれば、明日死ぬ確率は、当然、70代の老人の方が高い。ところが40歳を過ぎれば、もう、70代の老人と比較しても、明日死ぬ確率は同じだというのだ。おそらく、データに基づいたものではなく「たとえ話」のようなものだろう。人は、ひとつ歳を取るごとに「死」に近づくが、40歳を境に、まるで双六の「3コマ進め」のようにぐっと「死」に近づいてしまうものらしい。（以下略）『人生には好きなことしかやる時間がない』

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

―人間はこの世に生を受けた時から、

「死」というものと背中合わせ―

そう言うとあなたは「そんなおどかさないでくださいよ」とおっしゃるかもしれません。

たしかに、普段の生活では、自分自身に「死」が必ず訪れるというその事実を、なかなか直視する機会は少ないですし、その自覚もありません。私自身もそうですが、今日と同じ明日が必ずまたやってくると、漠然とそう考えます。

しかし、時に身内や親しかった友人等、自分のかけがえのない大切な存在が旅立ってしまった時、また自分と同じ年、もしくは年下の人が亡くなった時などには、言いようのない悲しみと共に「自分も…」と自らの死について考えることと思います。

日常に戻ればいつの間にか忘れてしまうのですが、世の中の事件や事故や病気の話などを思えば、本当は年齢に関わらず、自分にもいつその時がやってくるかは誰にもわからない。それが「生」の裏側にある「死」というものの現実です。この世に「無常」でないものは存在しません。人も、社会も、国家も、世界も、天体も、そして自分自身も・・・。

いつか必ず「死」を迎える「無常」である私達であるということは紛れもない事実ですが、無常の身である我々の為に、経典には忘れてはならないもう一つの事実が書かれています。「死」のその先の世界のこと。たとえいつどこでどんな状況で命を終えることになろうとも、阿弥陀様を信じ「南無阿弥陀仏」と心からお念仏をとなえた者は、必ず阿弥陀様のお迎えが頂けるということ。そして、阿弥陀様のお導きで極楽浄土に往生させていただけるということ。このことも、お釈迦様の説かれた経典に示された、紛れもない真実です。

冒頭のお歌は、そんな「無常」である我々に対して法然上人がいつでもお念仏をとなえ続けることをお勧めしたものです。平生（へいぜい）、常日頃からお念仏をおとなえしなさいということです。そんなことからも、夜眠る前に、必ず、十遍お念仏をおとなえしてから眠りなさい。普段は意識しないかもしれないですが、無常ということを考えれば、もしかしたら、そのまま永い眠りになることもあるわけだから、眠る前にも必ずお念仏をおとなえしてから眠りなさい。そして次の日、目覚めることが出来れば、それは有難いことですし、もし、そのまま永い眠りになったとしても、阿弥陀様のお導きによって、間違いなく極楽浄土に迎えとっていただけるのです。ですから、平生の念仏、常日頃の念仏が大切なのです。

誰もが必ず死を迎える私たちです。その時になってあわてないよう普段からお念仏をおとなえしましょう。そして眠る前にも必ず南無阿弥陀仏と十遍おとなえしてから、眠りにつきましょう。ともすると、今日の眠りが、永久の眠りになるかもしれないのですから。

合掌

執筆　東源寺　押野見孝道

表紙（法然上人立教開宗のお姿）解説

表紙のお姿は、法然上人四十三才「立教開宗」のお姿です。

十五歳で比叡山に登られ、修行や学問を究められた法然上人は、比叡山のみならず、諸宗の学匠からも、その学識を讃えられ「智慧第一の法然坊」と称賛されました。しかし、なおも苦しみ多い衆生が、救われる道を求め、『一切経』五千余巻（お釈迦様の説かれた全ての経典）をお読みになることが五遍もありました。

そして、ついに中国・唐の善導大師の書かれた、『観経疏』（『観無量寿経』の解釈書）の中から、どんな罪深いものであっても、「南無阿弥陀仏」ととなえれば、阿弥陀さま自らがすべての人を救おうと浄土往生の行として誓われたお念仏の功徳によって救われるのだという阿弥陀さまの大慈悲を明らかにされます。

時は承安五年（一一七五）の春、生年四十三歳。法然上人は、たちどころに他の行をすてて、お念仏ひとすじの道に入られました。この時を浄土宗の『立教開宗』といいます。

表紙絵の、右手に巻物、左手に数珠を持ち、お立ちの姿は浄土宗を開かれ京の都で教えを説かれるために比叡山を下りられた時のお姿です。

手に持たれた経巻こそが、浄土宗の高祖、善導大師の『観経疏』という書物です。

合掌

参考文献・・・『法然上人行状絵図』

解説執筆　願生寺　齊藤實朗

法然上人略年表

（『法然上人行状絵図』による）

一一三三（長承二）	1才	四月七日、美作国（岡山県）にて、ご生誕。幼名　勢至丸。
一一四一（永治元）	9才	父、漆間時国、明石定明の夜討ちにあい、死去。叔父・観覚の居る菩提寺に身を寄せる。
一一四七（久安三）	15才	比叡山に登り、源光に師事。
一一五〇（久安六）	18才	皇円のもとで出家、受戒。
一一五六（保元元）	24才	西塔黒谷に隠遁し、叡空の門に入る。法然房源空となる。
一一七五（承安五）	**43才**	嵯峨の清涼寺に参籠。その後、南都の学匠を尋ねる。**立教開宗（専修念仏に帰入する）**
一一九七（建久八）	65才	二祖・聖光房弁長、門下に入る。
一一九八（建久九）	66才	『選択本願念仏集』を撰述。
一二一二（建暦二）	80才	一月二十三日、『一枚起請文』を記す。一月二十五日、御往生。

SAIJOSEI

発行　埼玉教区浄土宗青年会

会長　齊藤栄規

編集委員長　押野見孝道